

Title	紅樓夢考(二)
Author(s)	金子, 二郎
Citation	大阪外国語大学学報. 7 p.170-p.175
Issue Date	1959-04-01
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80156
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

紅　　樓　　夢　　考　　(二)

金　　子　　二　　郎

一．紅樓夢の版本（つづき）

前稿を書いてからあとで、中国でまた二三の本が出版された。主なものについて補記する。

一．紅樓夢80回校本（俞平伯校訂・人民文学出版社版・1958年、北京）

この序言については前にふれた。本文の刊行が遅れていたわけである。わたしは根本的に80回本というものを認めたくないの、その立場からは、この本は無意味と思わざるをえない。この80回本も、巻末に後40回をのせていることが、なによりも雄弁に紅樓夢は120回である、後40回は他の小説における続書、または紅樓続夢などと、同一視すべき性質のものでないことを、物語っていると思う。しかし、この本は80回校本なのだから、その点はしばらくあずかって、詮議しなければならない。内容については詳しくは校勘記を見なければわからないのであるが、戚本を底本とし、脂硯齋庚辰本を主たる校本にし、他の抄本を参考にしたということについて、何よりも気がかりなのは戚本である。戚本が相当古い本であることは、だいたい論証されているが、原本はないはずである。また有正書局版の出たときに、校合(?)の責任を負った人もわからない。いわば身許不詳の本である有正書局石印本を、底本とすることは、正しかったかどうかということである。わたしは危いと思う。有正書局版に、作為不作為はともかくとして、修訂が加えられたことはなかったとは、いい切れないはずだからである。この戚本を底本としたという点だけから、わたしは古抄本の校訂本としても、この本は信用できないと思う。前記の“脂硯齋重評石頭記”(庚辰本の欠を己卯本で補ったもの、文学古籍刊行社刊、1955年4月)のほうが信用できるわけである。

二．紅樓夢書録（一粟編、古典文学出版社版、1958年、上海）

これはまたご苦労な本である。およそ紅樓夢に関係のある本から、映画・連環画にいたるまでを集めて解題したものである。ここまで集めるにはたいへんな努力を要したろうと思うが、それでもお脱があるのではなからうか。しかしたいへん便利なものであることはたしかで、研究者にとっては身辺から離せないものである。ただ索引がないのは幾重にも惜しい。中国の人は一般に索引をあまり重要視しないらしいが、とくにこの種のは、索引の有無で効用が倍にも半分に

もなるものである。編者はまさか研究者にこの本をはじめから通読せよというのではあるまい。

二. 紅 楼 夢 の 作 者

“この書の作者については、以前には、わからないという人もあったが、いまでは、いろいろ書きのこされているところからみて、曹雪芹が紅樓夢を著わしたとって、もう問題はない。”(俞平伯：紅樓夢80回校本序言)。事実いまではもう紅樓夢の作者は曹雪芹ということにきまっているようだ。後40回が高鶚の補作であるというところから120回本に著者として、曹雪芹・高鶚と二人の名をならべたものもあるが(人民文学出版社本)、少くとも前80回については、それが曹雪芹の著作であることを疑った人は、最近の“論争”の間にもなかったようだ。しかし果してそれでいいのか、曹雪芹の著作であるということは、それほど確証のあることなのだろうか。

この問題を正面からとりあげたのは、わたしの知る限り、胡適だけである。“紅樓夢考証”では“著者は誰か?”というところから、著者の問題がとりあげられているが、胡適以後は最近の論争にいたるまで、すべて“著者は曹雪芹である”というところから出発して、曹雪芹についての探求を進めている。従って曹雪芹の身世については、資料も多く出てきており、かなり詳しくわかるようになったが、紅樓夢は、果して曹雪芹の創作であるのかどうかということになると、胡適以後はっきりしたものは出されていない。王国維の紅樓夢評論にいう“若夫作者之姓名胡適考証未見曹雪芹胡適考証與作者之年月。其為說此書者所當知。似更比主人公之姓名為尤要。顧無一人為之攷証者。此則大不可解者也。”はいまとなっては解決したかの如くであるが、それは胡適の考証を全面的に認めてのことである。

胡適はその“考証”で、著者に関する結論の(1)として“紅樓夢の著者は曹雪芹である”と断定している。いまその論断のあとをたどってみよう。

(1) この書の第1回に、この書の原稿は、空空道人が石に書いてあったのを、うつしてきたものだから、石頭記といった。……後に曹雪芹が悼紅軒で、10年間これを読んで、五たび手を入れ、目録をつけ、章回を分け……またこれに一絶を題した。これがすなわち石頭記の縁起である。……といふ。

(2) 120回にもまた曹雪芹がこの書を伝えられた話がある。

(3) 右の、石とか空空道人とかいうのは、曹雪芹の仮託した縁起なのだろう。それで当時の人はこの書は曹雪芹が書いたものと認めていたらしい。袁枚の隨園詩話巻2に、“(曹棟亭)其子雪芹撰紅樓夢一書、備記風月繁華之盛。中有所謂大觀園者、即余之隨園也。……”とある

が、われわれが現在もっている紅樓夢に関する旁証資料では、これが一番早いものである。これによって乾隆時代の文人が、紅樓夢は曹雪芹が作ったものであることを承認していたことがわかる。

以下は曹雪芹の身世についての考証であって、曹雪芹が紅樓夢の作者であるという論証は右以上には出ない。胡適が出ないばかりでなく、他の人においても、今日に至るまで、これ以上の有力な論断はない。しかしこれでは何としても不十分である。

(1) 紅樓夢第1回はもともと問題の多い回であって、冒頭の部分からして評文の混入を疑わせるものがあるが、それとともに、わたしはこの“後因曹雪芹於悼紅軒中披閱十載，增刪五次……”という部分は、曹雪芹以後において、紅樓夢がこの形にまとめられたという証拠になるのではないかと思う。雪芹が曹霑の別号であることは、近年各家の考証ではほとんど動かないところであるようであるが、名の霑，字の芹圃よりも号の雪芹の方が、他称としてより広く通用していたらしいことは例証するまでもなく、最近多く出てきた曹雪芹関係の資料をちょっとみればすぐわかる。不思議なことは、最近曹雪芹関係の資料は多く出てきたが、その全部が曹雪芹以外の人のものであり、曹雪芹自身のものは詩の一句よりほかないことである。まさか紅樓夢以外何も書かなかったということはあるまいが、彼が自分自身何と称していたか旁証を得ないのは残念である。しかし名・字・号と多くの名をもっていた人であるならば、自称と他称は使い分けられるのが、まずは常識ではあるまいか。雪芹というのは客気を含んだ他称であり、自称ではあるまい。また悼紅軒という名も紅樓夢にちなむものとみられるが、してみれば一応この小説の形ができてからあとで、加えられたものとみるのが自然である。

さらに“増刪五次”ということは、脂硯齋の五評となにか関係をもってはいないだろうか。これらをつなぎあわせて考えると、今日われわれが小説紅樓夢としてみるものは、①その原形は早くからあった。②曹雪芹はそれを愛読し、整理に努力した。しかしそれは必ずしも曹雪芹一人ではなく、脂硯齋（脂硯齋が曹雪芹その人でないことは旁証もあり、疑う余地はない。）のような人もいた。③曹雪芹の死によって、中心人物を欠き、その整理工作は頓坐した。……という形ででき上がったものであり、少なくとも曹雪芹以外の人の手がかなり入っていることが想像される。しかもそれは未完成なものである。前にも触れたが、紅樓夢は、どの部分を誰が書いたということには関係なく、120回完結したもの全体として、はじめて問題になるのであって、80回尻切れでは未完成作品でしかなく、価値は半減以下になる。後40回については、それが高鶚の補作したものであることは、高鶚じしん序文で白状しているとみてよいだろう。高鶚以前に後40回あるいはそれに類するものがあったかどうかは全く憶測を出ないのだから、高鶚作としておいて大過はあ

るまい。その筋の運びが果して曹雪芹の意図に副うものであるかどうかなどということは、不必要な詮索であり、高鶚も紅樓夢作者の一人であることをいまは認めねばなるまい。前80回については、曹雪芹あるいはその他の人たちの関係した程度がはっきりしない、——創作か整理か、整理としてもどの程度のことかなど、知りようもない。とすれば、曹雪芹一人にこの小説作者の榮譽を担わせるのは、少し過当ではなからうか。

(2) の120回にみる話は、もちろん1回に合せて終りを結んだものであり、これがあるから曹雪芹著作であるというのは、高鶚・程偉元が前80回を曹雪芹著作と認めていたのでなければ成り立たない。しかもそれは反対である。程・高は曹雪芹著作とは認めていない。ただ手を入れたと書いてあるといっているだけである。程偉元初排本の序に、“作者相伝不一，究未知出自何人，惟書内記雪芹曹先生刪改數過”とある。(俞平伯80回校本序言注〔1〕にこの文を程本高鶚序として引いているが、高鶚ではなく巻頭の程偉元の序である)。120回には1回と同じ記述があるにかかわらず、“作者相伝不一”といっていることは、曹雪芹著者説を認めていなかったという証拠にはなるが、曹雪芹の作と認めていたという証拠にはなるはずはない。

(3) の随園詩話はその記述に誤りがあることを、胡適も指摘しており、袁枚は紅樓夢について、また曹氏についてそれほど深く知っていたとも思えず、ただ大観園のモデルはじぶんの随園だということをいいたかったのではあるまいか。随園詩話以外にも、たとえば緑煙瑣窓集(清、富察明義)などにも、“曹子雪芹出所撰紅樓夢一部備記風月繁華之盛，蓋其先人為江寧織府，其所謂大観園者即今隨園故址，惜其書未伝世，鮮知者，余見其鈔本焉(題紅樓夢)”とあるが、これは随園詩話と全く同じで、取るべきところがあるとすれば後段だけでしかない。楊鍾義の雪橋詩話に“敬亭(敦誠)……嘗為琵琶亭伝奇一折，曹雪芹(霽)題句有云，白伝詩靈応喜甚，定教蜚素鬼排場。雪芹為棟亭通政孫，平生為詩大概如此，竟坎珂以終……”とあるのは胡適も引用しており、白伝詩靈……の句は、たた一句今日まで伝えられた“紅樓夢以外の”曹雪芹の作品であるが、楊鍾義がなぜ雪芹について、“坎珂以終”というだけで紅樓夢を書いたといわなかったか、わたしには理由のあることに思える。楊鍾義は旗人と旗人の文学については詳しい人だそうである。曹家が旗籍であったかどうかはともかくとして、清朝の大官の一族で、宗室関係にも友人を多くもった人で、たとえ紅樓夢は小説であるといっても、時代の人々に珍重された文章であり、それを書いたことを逸するはずはない。わたしは楊鍾義は曹雪芹が紅樓夢を書いたという俗説(通説?)には組しなかった、少なくとも確信がもてなかったのではないかと思う。ということはまたわたしの根拠のない感じでしかないが、曹雪芹著者説は胡適以来すこしも確証を添えていない次第で、事実もう一つ納得できないのである。

前述のように、曹雪芹の身世については最近資料も多く出て、はっきりとしてきた。しかしはっきりしたのは曹雪芹の身辺・人がらであって曹雪芹がいかにして紅樓夢を書いたかということではない。詳細な年表も作られているが（周汝昌）、これとて一ヶ所崩れれば全部崩れるような、不安定な假定・推量の上に立っているものである。決定的にいえることは、曹家は江南の名家であった。ことに曹雪芹の祖父曹寅（1658～1712）は当代の名士で、江寧織造、兩淮巡鹽御史などを歴任し、また藏書家として知られ刻書も多い。曹雪芹に至って家風振わず、北京で不遇の生活を送ったが、なお宗室との交際はあったらしい。要するに斜陽族だったわけであるが、紅樓夢の成立については、相当深い関係をもっているらしい、という程度のことである。後年、裕端の衰窓閑筆に、“紅樓夢一書、曹雪芹雖有志於作120回、書未告成即逝矣。諸家所藏鈔本80回、書後之目錄率大同小異者、蓋因雪芹改風月宝鑑數次始成此書、抄家名於其所改前後第幾次者分得不同、故今所藏諸稿未能画一耳。此書由来非世間完物也。”というのは、曹雪芹が風月宝鑑として伝えたものを整理したと解するならば、真相に近いのではあるまいか。風月宝鑑については、脂硯齋甲戌本眉批に“雪芹旧有風月宝鑑之書、乃其弟棠村序也……”というのがあるが、おそらく紅樓夢の前身で、蕪雜な俗書であったかもしれないことは、題名からも想像されるが、紅樓夢の原形が出たものではないかと思う。これを紅樓夢の異名とみるよりも前身とみるほうが妥当なようである。81回以後120回までについては、その目録が元来あったにせよ、なかったにせよ、書かれたのはたしかに前80回とはちがった人によってであり、それが高鶚の手になることは、高鶚じしんの文章によっても、また旁証を考えても、ほとんどまちがいないこと前述のとおりであるが、高鶚が前80回に対するじぶんの解釈に基いて、これを完成したものであり、純粹に創作とはいえないまでも、彼の創意はかなり強く入っているのは当然である。しかもこの後40回がなければこの小説は完成していないのである。高鶚のしたことは、過小評価すべきではない。

こう考えてくると、紅樓夢の作者についてわたしのたどりつく結論は、

①曹雪芹は、おそらく他の人との協力によって、風月宝鑑（？）をもとにして、整理・編集して紅樓夢を作りはじめていたが、80回以后完成をみないで死んだ。（その間に脂硯齋抄本各種の成立が考えられる。）②高鶚の補作によって120回本として完成した。③その後の整理は王希簾によってまとめられて、紅樓夢はようやく定着した。ということになる。①の旁証として、紅樓夢前80回を通じてみられる、なんとしても一人の手によって一貫して書かれたとは認め難い文章の不統一を、具体的に指摘することができるし、必要があるとも思うが、いまそれをここにもち出すことは、紙数の制限もありできない。しかしこれは他の小説には見られないことであり、紅樓夢の作者が決して一人ではないことを示していると考ええる。

曹雪芹が紅樓夢の成立に深い関係をもっていることは、もちろん否定はできない。しかし原作者と断定できるかといえ、まだそれだけの材料は揃っていない。疑いをとどめながらも、ほかに誰という作者を定められない以上、曹雪芹・高鶚の二人をならべて作者と一応しておくことはよい。しかし、少くとも現在明らかにされている程度の事だけで、曹雪芹を原著者として、その用意や思想性まで云々することは、少しく安易に、武断にすぎることではないかと考える。厳しくは原作者は不明というのが、現在われわれの知りえていることの全部ではなからうか。

(1958.11.25)